

美的経験の最小説： その問題点と修正方針*

藤本心太

概要

Robert Stecker attempts to approach the concept of aesthetic value using the explanatory term “aesthetic experience.” For this position (experientialism) to hold, it is necessary to properly define the aesthetic experience.

In this paper, I critically examine Stecker’s definition of aesthetic experience, namely the minimal view. The minimal view is used as a foundation for further discussion in aesthetics, but as this paper points out, it has several problems. First, contrary to Stecker’s expectations, the requirement of discrimination—that “in aesthetic experience, one must attend to the object’s properties in a discriminating manner”—is insufficient to adequately distinguish aesthetic pleasure from non-aesthetic pleasure (Section 3.1). Second, the “attention for its own sake” requirement—namely, that “in aesthetic experience, one must attend to the object’s properties for their own sake or for the sake of this very experience”—can be interpreted in multiple ways (due to its obscurity); however, regardless of which interpretation is adopted, the minimal view cannot adequately specify the extension of aesthetic experience (Section 3.2).

This paper also proposes a modification of the minimal view to resolve these issues. This modification involves expanding the concept of form while eliminating “quality” and “meaning (meaningful features)” from the objects of attention in aesthetic experience (Section 4.1). Furthermore, this paper fleshes out the requirement of discrimination by providing two paradigmatic examples of “attending in a discriminating manner”. One of these has been largely overlooked in previous research (Section 4.2).

Keywords: 分析美学, 美的経験, 美的価値, 最小説

* CAP Vol. 17 (2026) pp. 171-193. Submitted: 2025.11.20. Accepted: 2026.8.3. Category: 研究論文(原著論文).
Published: 2026.8.24.

1 導入

本論文は、Robert Stecker によって提案された美的経験の定義(最小説)が抱える問題点を指摘し、その修正方針を示すものである。

まず、本論文が対象とする美的経験とはどのようなものを、具体例によって大まかに示しておこう。たとえば、優美な絵画やいきいきとした彫刻、美しい夕焼けなどを見て私たちは心を動かされる。これらは正の(positive)美的経験である。一方で、負の(negative)美的経験を私たちはすることもある。たとえば、味気ない映画やしまりのない小説、どぎついデザインの広告は、しばしば私たちを不快にさせる。本論文が対象とするのは、これらの正および負の美的経験である¹。

本論文は、美的経験の定義の一つである最小説が抱える問題点を指摘し、その修正方針を示すものである。最小説という名称の由来は、Jerrold Levinson による美的経験の定義(二層説)からいくつかの要件を除いた、より小さな(minimal)定義としてそれが考案されたことにある(cf. Stecker 2006a: 4; Levinson 1996: 6)。Stecker が 2006 年に最小説を提示して以来、比較的多くの論考を通して、その批判と(Stecker 自身による)擁護が行われてきた²。その結果、最小説はいまなお有望な定義として存立し続けており、美学においてより発展的な議論をする際にはしばしば論拠として用いられている³。美的経験の定義が、美学において発展的な議論をするための土台となるものであり、かつ、最小説が有望な定義として考えられているならば、その問題点を指摘し、修正方針を示すことには確かな意義があるはずだ。

本論文は、美的経験の定義の一つ(最小説)を批判的に検討するものであるが、そもそもなぜ、美的経験の定義を気にかける必要があるのか。Stecker は、最小説を初めて提示した論文「美的経験と美的価値」の導入で、次のように述べている。

私たちが美的なものに興味を持つのは、美的価値という特別な価値があると私たちは信じているからである。すべての美学的概念[引用者補足:美的価値、美的経験、美的性質、美的判断など]のなかで、これ[美的価値]こそが、私たちが究極的に理解する必要があるものである。美的経験や美的性質などを気にかけるものたちは、それら[美的経験や美的性質]が人間にとって偉大な価値を持つ何

¹ Noël Carroll は、正でも負でもない、中立の(indifferent)美的経験が存在すると主張している(Carroll 2006: 92)。だが、中立の美的経験が存在することについては明確な合意があるわけではない(e.g. Stecker 2006b: 284)。本論文では、正ないし負の美的経験に議論の焦点を絞る。

² Stecker 本人による最小説の擁護は、以下の著作で行われている(Stecker 2006a, 2006b, 2010: chap. 3, 2019: chap. 2, 2023)。Carroll は一時期まで、Stecker の立場を直接批判していた(Carroll 2001, 2002, 2006)。それ以降の Carroll は最小説に直接は言及していないものの、最小説に類似した立場への批判を続けている(Carroll 2012, 2015, 2023)。この二人による論争については、Victor Durrà-Vilà による議論が詳しい(Durrà-Vilà 2016)。なお、Durrà-Vilà の議論は最終的に最小説を擁護しようとするものであるが、本論文は最小説の問題点を指摘し、その修正案を提案するものである。

³ たとえば、最小説が論拠の一つとして用いられているものとして、痒みのような身体感覚が美的経験になると主張する Sherri Irvin の議論や、静寂(silence)が美的鑑賞の対象になると主張する Eric Anderson の議論、また、意識は崇高であると主張する新川拓哉の議論がある(Irvin 2008a: 27; Anderson 2020: sec. 4.b; Niikawa 2025: 732-3)。

かを提供するものであると信じているからこそ、美的経験や美的性質を気にかけるのである。

(Stecker 2006a: 1-2)

この引用から分かるように、Stecker を含む多くの美学者が美的経験の定義を気にかけるのは、美的経験という説明項が美的価値を理解・説明するにあたって重要な役割を果たすと期待しているからである(その一方、以上の引用が示唆するように、美的経験ではなく美的性質に注目することで美的価値を理解・説明しようとする美学者もいる)。美的経験の定義がどのように問題となるのかについて、より詳しく説明しよう。

まず、美的価値とは美しさや醜さ、優美さやけげんしさなどの、正ないし負の価値を指す。そして、美的価値の正体を明らかにすることは、美学における中心的な課題の一つである。つまり、私たちの身の回りには美的価値を持つさまざまな対象があるが、美的価値とはそもそもどのようなものなのかを説明することが、美学上の重要課題なのである。

そして、Stecker を含む多くの美学者は、美的経験に注目することで美的価値を理解・説明しようとしてきた。この立場は、対象がもたらす独特の経験——美的経験——によって美的価値を説明しようとする立場であり、それゆえ経験主義と呼ばれている。経験主義は、美的価値を経験(とくに快や不快の経験)によって理解・説明しようとする点で、美的価値についての直観と伝統に従うものであり、人気のある立場となっている(cf. van der Berg 2020: 1, Stecker 2019: 25-29)。経験主義は、美的価値に対する唯一のアプローチではないものの、デフォルト・セオリーと称されることすらある(Shelley 2010: 719-720; van der Berg 2020: 12fn2)⁴。

経験主義は、美的価値という被説明項に対して美的経験という説明項からアプローチするものであるが、このような立場が成立するためには、そこで説明項として用いられている美的経験とはどのような経験かを明らかにする必要がある。まとめると、美的価値の正体を明らかにすることは美学上の重要課題であり、この課題に対する人気のある立場として、経験主義がある。そして、経験主義を成立させるためには、美的経験に適切な定義を与える必要がある、ということだ。このような仕方、美的経験の定義が問題になるのである⁵。

⁴ James Shelley 自身は経験主義に反対している(Shelley, 2010)。なお、Shelley はデフォルト・セオリーという呼称を、経験主義のなかでも特定の立場——美的経験の対象を知覚的形式に限定し、美的価値を快によって説明しようとする立場——を指して用いることもある(Shelley, 2019)。

⁵ 以上で確認したように、Stecker が最小説を提案したことには、美的価値を理解・説明するという目的があった。また、すでに述べたように、最小説の批判と擁護は比較的多くの論考を通して行われてきた。だが、〈最小説は美的価値を適切に説明することができるか〉という点は、これまで十分に検討されてこなかった。その要因の一つには、次のような事情がある。美的経験の定義をめぐる論争のなかで、最小説に対抗する説として優劣が特に争われてきたのは、Carroll による内容志向説である(cf. Carroll 2006: 91-5; Stecker 2006a: 5-10, 2006b, 2010: 58-60[邦訳 95-8 頁]; Durà-Vila 2016)。内容志向説は、最小説とは異なり、〈美的価値を美的経験によって説明する〉という目的のために考案されたものではない。このことは、内容志向説が美的経験の説明項として美的性質(これは、美的価値と基本的に重なるものである)を用いている点からも明らかである(cf. Carroll 2002: 164)。〈最小説は美的価値を適切に説明することができるか〉という点がこれまで十分に検討されてこなかったことには、〈美的価値を美的経験によって説明する〉という目的を持たない定義(内容志向説)と最小説との優劣が問われてきたという事情がある。最小説を批判的に検討する他の

本論文の構成を示す。続く第2節では、最小説の概要を確認する。本論文の中心的な主張は、第3節で展開される。そこでは、最小説が掲げる二つの要件に問題があると主張する。第4節では、最小説に対する修正方針を検討する。最小説を実際に修正し、それを擁護することは本論文の範囲を超えてしまうが、本論文で指摘する問題点に対処することができるような、見込みのある修正案を提案する。

議論を始める前に、あらかじめ断っておくべきことがある。本論文の議論は、美的価値をめぐる「美的問題」に取り組むものである。美的問題とは、美的価値を満足のいく仕方で理解・説明するために答える必要がある、次の三つの問いのうちの一つである(cf. Lopes 2018: 41-3, 2024: 36)。

美的問題(線引き問題):何が美的価値を美的にしているのか。

価値問題:何が美的価値を価値にしているのか。

規範問題:なぜ、ある対象が美的価値を持つことが、人が何かをする理由になるのか。

これらの問いが明示的に区別されるようになったのは、Dominic McIver Lopes がこれらの区別を導入した2018年以降である(なお、2018年の当初は、価値問題と規範問題は区別されていなかった)。つまり、最小説が提案されてからしばらくの間は、これらの問いが明示的には区別されていなかったのだ。とはいえ、以上の区別を踏まえて振り返るならば、Stecker がもっぱら念頭に置いていたのは美的問題だといえる。というのも、Stecker が気にかけていたのは、美的な価値や経験と、非美的な価値や経験とを適切に分類することであったからだ(cf. Stecker 2006a, 2006b, 2010)。本論文の議論も、もっぱら美的問題に関わるものである(第3節参照)。最小説に基づき美的価値を理解・説明するという目的を十分に達成するためには、美的問題だけでなく、価値問題や規範問題についても論じる必要がある。だが、これはそれ自体で多くの議論を要するため、今後の課題としたい。

2 最小説の概要

本節では最小説の概要を確認する。

最小説によれば、美的経験とは、「対象の形式や質、あるいは意味ある特徴に、それらを識別するような仕方で、それら自体のために、もしくはこの経験自体のために注意を向ける経験」である(Stecker 2006a: 4, cf. Stecker 2006b: 283-4, 2010: 52-3[邦訳85頁], 2019: 23, 2023: 104)。最小説で用いられている専門的な用語や言い回しについて、その内実を順番に確認していこう。

最小説では、美的経験において注意が向けられるものとして、対象の形式(forms)・質(qualities)・意味ある特徴(meaningful features)が挙げられている。形式・質・意味ある特徴というリストは、美的経験に対するLevinsonの定義(二層説)からSteckerが引き出してきた要素である(Stecker 2006a: 3-4, 2010: 51-3[邦訳84-5頁], 2019: 22)。その一方で、形式・質・意味(意味ある特徴)というリストは美的経験における

論文から本論文が異なる点の一つは、〈最小説は美的価値を適切に説明することができるか〉という点に照らして——最小説が考案された当初の目的に照らして——検討を行う点である。

注意の対象を厳密に特定するようなものではなく、むしろその提案のようなものであると Stecker は述べており、それぞれを詳しく特徴づけようとはしていない(Stecker 2019: 23)。そのため、ここでは Stecker ないし Levinson による説明を頼りにしつつ、形式・質・意味(意味ある特徴)に対する大まかな理解を確認するにとどめよう。

まず、美的経験において注意が向けられる「形式」とは、〈対象における諸要素の配置〉あるいは〈その結果として成立する対象の姿〉を指す、とここでは理解しておこう(cf. Levinson 1996: 5; Stecker 2019: 28)。たとえば、オリンピックシンボル(五輪)においては、異なる色をした五つの円が、左から青・黄・黒・緑・赤の順に、上下に互い違いになるように、そして部分的に重なるように配置されている。このとき、オリンピックシンボルの「形式」とは、以上のような〈諸要素の配置〉、あるいは〈その結果として成立する対象の姿〉を指す。なお、繰り返しになるが、以上は形式に対する大まかな特徴づけであることに注意しよう。第 4.1 節では、形式に対するより適切な特徴づけについて検討する。

次に、「質」とは、対象の知覚可能な性質である(Stecker 2010: 69[邦訳 111 頁], 2019: 23)。たとえば、対象の色や形(shape)、香り、味などが「質」に分類される。

最後に「意味」ないし「意味ある特徴」について確認する。Stecker が最小説を提示する際に用いる表現には若干のブレがあり、このリストに「意味」を含めるときもあれば(Stecker 2019: 23)、「意味ある特徴」を含めるときもある(Stecker 2006a: 4, 2006b: 283-4, 2010: 52-3[邦訳 85 頁])。すでに確認したように、Stecker がこのリストを提案として示していることを踏まえるならば、最小説は「意味」と「意味ある特徴」の両方をリストに含めていると考えるのがよいだろう。「意味」によって Stecker が念頭に置いているのは、「記号の内容」である(Stecker 2019: 23)。これには、たとえば絵画における描写内容や、文学作品の内容(ストーリーなど)が含まれる。Stecker が「意味」だけでなく「意味ある特徴」にも言及するのは、絵画鑑賞のあり方をより正確に捉えるためである。典型的な絵画鑑賞において私たちが注意を向けるのは、絵画の表面(質ないし形式)だけでなく、また絵画の描写内容(意味)だけでもない。私たちは、絵画の表面と描写内容の両方に注意を向けるのである(Stecker 2010: 50[邦訳 81-2 頁]; cf. Nanay 2016: chap. 3)。つまり、典型的な絵画鑑賞において、意味や表面(特徴)のどちらかではなく、その両方、すなわち「意味ある特徴」に私たちは注意を向けるのだ。

以上が、形式・質・意味(意味ある特徴)の概要である。最小説において、これらは連言ではなく選言によって結ばれている。すなわち、最小説が要求するのは、形式・質・意味(意味ある特徴)のうちの少なくとも一つ以上に注意を向けることであり、これらすべてに注意を向けることではない。なお、以下では簡略化のために、対象の形式・質・意味(意味ある特徴)を指して、〈対象の諸性質〉と呼ぶ。

次に、最小説によれば、美的経験が成立するためには、対象の諸性質にそれら自体のために、もしくはこの経験自体のために注意を向ける(attending to these for their own sake or for the sake of this very experience)必要がある。だが、注意が対象の諸性質に「それら自体のために、もしくはこの経験自体のために」向けられる、とはどういうことか。実は、この要件には十分な説明が与えられておらず、複数の解釈が可能である。そして、本論文の主張は、いずれの解釈を採用したとしても最小説は問題含みになる、というものである。この要件に対する詳しい検討は第 3.2 節で行うこととし、ここでは Stecker による説明を参

照するにとどめよう。以下では、表現のくどさを避けるため、この要件を〈それ自体のための注意〉要件と呼ぶ。

〈それ自体のための注意〉要件が満たされるとき、「対象の諸性質およびそれらに注意を向ける経験が、それ自体のために評価される」ことが含意(imply)される、と Stecker は述べている(Stecker 2010: 53[邦訳 86 頁], 太字は引用者)。そして、「評価する」という表現によって Stecker が意味しているのは、〈なんらかの快や満足を得る〉ことである(2010: 62fn5[邦訳 86 頁])。つまり、「対象の諸性質およびそれらに注意を向ける経験が、それ自体のために評価される」と述べる際に Stecker が意味しているのは、〈対象の諸性質に注意を向けること自体によって、なんらかの快や満足が得られる〉ということである。まとめると、Stecker によれば、〈それ自体のための注意〉要件が満たされるとき、〈対象の諸性質に注意を向ける経験自体によって、なんらかの快や満足が得られる〉ことが含意される。

以上の点については、次のような批判がすぐさま想定される。Noël Carroll が指摘するように、美的経験は必ずしも快や満足、楽しみなどを伴うとは限らない。一部の美的経験は、不快や不満足などを伴う、心を乱すような(disturbing)経験なのだ(Carroll 2001: 83)。だとしたら、評価する(すなわち、快や満足などを得る)ことを美的経験の必要条件とすべきではない。

以上のような批判に対して、Stecker は次のように応答する。経験やその対象の諸性質をそれ自体のために評価することを最小説は要求するが、その評価は正の評価に限られない。その評価は負の評価であってもよいのだ(2006a: 5, 2010: 55[邦訳 89 頁])。すでに指摘したように、「評価する」という表現によって意図しているのは〈なんらかの快や満足を得る〉ことだ、と Stecker は述べている(2010: 62fn5[邦訳 86 頁])。だが、Stecker が負の評価を許容していることを踏まえるならば、「評価する」という表現の内実は、「なんらかの快や不快、満足や不満足などを得る」ことであると理解するのがよい⁶。〈それ自体のための注意〉要件については第 3.2 節でより詳しく検討するが、ひとまずここでは、この要件が満たされるとき、〈対象の諸性質に注意を向ける経験自体によって、なんらかの快や不快、満足や不満足などが得られる〉ことが含意される、ということを理解しておこう⁷。

最後に、最小説において、美的経験における注意は識別するような仕方で(in a discriminating manner)向けられると指摘されている。これを識別性要件と呼ぼう。実は、この識別性要件の内実(識別するような仕方では注意を向けるとはどういうことか)についても、Stecker は十分な説明を与えていない。とはい

⁶ この理解は、「評価する」という表現の Stecker による用法に反しないものである。というのも、Stecker は、〈ある経験自体によって不快や嫌悪を覚える〉ことによっても、〈その経験がそれ自体のために評価される〉という要件が満たされる、と論じているからである。なお、これは Stecker が自著の邦訳において補足したものである(Stecker 2010: 邦訳 89 頁, 訳注 16)。

⁷ 本論文で扱うことはできないが、興味深い論点として、快や満足(ないし不快や不満足)などを伴わないが、対象を高く(ないし低く)価値づける経験を美的経験として認めるべきか、という論点がある。Bence Nanay が挙げる「擦れた批評家 jaded critics」は、このような経験をしていることだろう(cf. Nanay 2019: 76-81[邦訳 135-8 頁])。このような経験も美的経験であると主張する論者もいる(e.g. Carroll 2001, 2002, 2006, 2012, 2015, 2023)。だが、快や不快、満足や不満足を得ることを美的経験の必要条件とする Stecker の立場からすれば、このような経験は美的経験ではない(cf. Stecker 2010: 58[邦訳 94 頁])。この論点はそれ自体で検討に値するものであるが、本論文では Stecker の立場に立って議論を進める。

え、Stecker は識別性要件の重要性(美的経験の定義において、なぜこの要件が必要となるのか)を示唆してはいる。Stecker によれば、この要件は、美的な快(美的経験を構成する快)を、非美的な快から区別する役割を果たしている。Stecker が非美的な快として例に挙げるのは、食事で空腹が満たされることによる快や、味を茫然とした仕方で味わうことによる快である(Stecker 2010: 49[邦訳 79-80 頁])。これらの快は、経験の対象に識別するような仕方で注意を向けずとも生じるため、美的な快ではない。食事が美的経験になるためには、対象(食べ物)の諸性質(味や舌触り、匂いや見た目、あるいはこれらの関係など)に、それらを識別するような仕方で注意を向け、それによって生じる快(美的な快)を経験する必要がある。美的な快とは、識別によってもたらされる快 (pleasure derived from discrimination)であるのだ(Stecker 2010: 49[邦訳 79 頁])。

以上を踏まえると、最小説は次のように整理できる⁸。

美的経験の最小説:

美的経験とは、対象の形式や質、あるいは意味ないし意味ある特徴に、それらを識別するような仕方で、それら自体のために、もしくはこの経験自体のために注意を向ける経験である。このような経験は、それ自体のために、正ないし負の評価がなされる。ここにおける「評価する」とは、なんらかの快や不快、満足や不満足などを得ることを指す。

3 最小説の問題点

本節では最小説が抱える二つの問題点を指摘する。一つ目の問題点は識別性要件に関するものであり、もう一つの問題点は〈それ自体のための注意〉要件に関するものである。

3.1 識別性要件にまつわる問題点

最小説によれば、美的経験が成立するためには、注意は「識別するような仕方で」対象の諸性質に向けられる必要がある。だが、第 2 節で指摘したように、Stecker はこの要件の重要性(美的な快と非美的な快とを区別すること)を示唆してはいるものの、この要件の内実(識別するような仕方で注意を向けるとはどういうことか)を十分に説明していない。定義が掲げる要件の内実が不明確であることは、そのこと自体が、その定義が持つ欠点として数えられる(cf. Durà-Vilà 2016: 87)。だが、本節で指摘する問題点は、より深刻なものである。

すでに述べたように、Stecker は、この識別性要件によって非美的な快(たとえば、食事で空腹が満たされることによる快や、味を茫然とした仕方で味わうことによる快)から美的な快を区別しようとしている(cf. Stecker 2010: 49[邦訳 79-80 頁])。だが、以下で指摘するように、Stecker の期待に反して、美的な快は必ずしも識別性要件のみによって非美的な快から区別されるわけではない。

⁸ 本文で指摘したように、Stecker は最小説を提示する際にやや異なる言い回しを用いることがある。本節における最小説の整理に最も近い言い回しは、Stecker (2006b: 283-4) に見つけることができる。

Stecker 自身が挙げている「空腹が満たされることによる快」について考えよう。満腹感に、それを識別するような仕方では注意を向けると、満腹感を漠然と経験している場合と比べて、より大きな快がもたらされることがあるだろう。このような仕方でもたらされる快は、満腹感に〈識別するような仕方では注意を向けること〉に由来している。だとしたら、Stecker の立場によれば、以上の快は美的な快であるということになる。だが、美的なものに関する伝統と直観は、この快を美的な快とは認めないだろう⁹。Stecker の期待に反して、識別性要件は、美的な快を非美的な快から区別するという役割を十分に果たしていないのである。

以上の反論は、次のような仕方でもより一般的に述べることができる。まず、私たちが経験する感覚の中には、それ自体が快(不快)を伴っているものがある。たとえば、満腹感(多くの場合)それ自体で快を伴っており、痛みはそれ自体で不快を伴っている。そして、そのような感覚に識別するような仕方では注意を向けると、より増幅された快・不快がもたらされるだろう。美的なものにまつわる伝統と直観に従うならば、これらの快(不快)は美的な快(不快)ではないはずだ。だが、識別性要件は、これらの快(不快)を美的な快(不快)として判定してしまうのである。

誤解を避けるために、次の三点を補足しておこう。

第一に、識別するような仕方では満腹感や痛みには注意を向けることによってもたらされる快(不快)は美的な快(不快)である、と Stecker の立場から主張すること自体は可能である。だが、そのような主張を擁護するためには、伝統と直観に反する十分な理由を提示する必要があるはずだ。

第二に、識別性要件の内実(識別するような仕方では注意を向けるとはどういうことか)が不明確である以上、Stecker の立場から、〈以上の満腹感の事例は識別性要件を満たさない〉と再反論する余地は残されている。だが、Stecker の立場からこのような反論をするためには、識別性要件により厳密な内実を与える必要がある(本論文第4.1節では、この要件に厳密な内実を与えるかわりに、他の要件をより厳密にすることで、美的な快と非美的な快とを区別する方法を提案する)。

第三に、以上の議論は、識別性要件が、美的な快を非美的な快から区別する役割を一切果たしていないと主張するものではない。味に識別するような仕方では注意を向けるかどうか、食事が美的経験になるかどうかを左右することは、確かにある。たとえば、味を茫然とした仕方では味わうことによる快と、美的経験であるような食事における快とを区別するものの一つは、識別性要件だろう(Stecker と同様にこの点を示唆するものとして、Nanay 2019: 27[邦訳 52-3 頁])。だが、以上の議論は、(現状の、厳密でない)識別性要件だけでは美的な快と非美的な快とを十分に区別することができない、ということを示している。

3.2 〈それ自体のための注意〉要件にまつわる問題点

最小説によれば、美的経験が成立するためには、対象の諸性質に「それら自体のために、もしくはこの経験自体のために注意を向ける」必要がある。だが、この〈それ自体のための注意〉要件がどのような場合に満たされるのかは不明確である。第3.1節でも述べたように、定義が掲げる要件の内実が不明確であることは、そのこと自体が、その定義が持つ欠点として数えられる(cf. Durà-Vilà 2016: 87)。だが、本節で指摘しようとする問題は、当要件の内実が不明確であるということにとどまるものではない。私がここで指摘し

⁹ この反例は坪井祥吾氏に負う。

たい問題は、この要件には(それが不明確であるために)複数の解釈を与えることができるが、いずれの解釈を採用したとしても最小説は美的経験の外延を適切に指定することができない、というものである。本節では、この要件のもっともらしい解釈(動機的評価としての解釈)を採用したとしても、最小説が問題含みになることを示す。

〈それ自体のための注意〉要件に対するもっともらしい解釈を検討する前に、見込みのない解釈の一つをあらかじめ示しておこう。この解釈は、美的価値にまつわる伝統的な見解に基づくものであるため、ここでの検討に値する^{*10}。その解釈によれば、〈それ自体のための注意〉要件が満たされるのは、〈対象の諸性質に注意を向けるという目的を除いて、他の一切の目的を持たずに、対象の諸性質に注意を向ける〉場合である。この解釈は、〈それ自体のための注意〉を〈対象に注意を向けるという目的を除いた、他の一切の目的を伴わない注意〉とするものなので、これを〈無目的としての解釈〉と呼ぼう。この解釈の背景には次のような美学的伝統がある。美的価値は、カント以来、「無関心性」と呼ばれるものと結び付けられてきた。そして、分析美学者である Jerome Stolnitz は、この無関心性を〈対象に注意を向けるという目的を除いて、他の一切の目的を持たずに、対象に注意を向けること〉と定式化した (Stolnitz 1960: 35; Shelley, 2022)^{*11}。無目的としての解釈は、Stolnitz による無関心性の定式化に基づいている。

だが、無目的としての解釈には、目的を伴う経験を美的経験から不当に除外してしまうという問題がある。分析美学者にとってはお馴染みの、次の思考実験がこのことを示している。

例えば、ジョーンズは翌日の試験で分析・説明できるようになることを目的としてある音楽作品を聴き、スミスはそういったさらなる目的を持たずに同じ作品を聴いたとしよう。ふたりの動機や意図にはたしかに違いがある。ジョーンズにはさらなる目的があり、スミスにはそれがない。しかしだからといって、**聴くこと**に関してジョーンズがスミスと異なるわけではない。ふたりとも音楽を楽しむかもしれないし、ふたりとも退屈するかもしれない。

(Dickie 1964: 58[邦訳 171-2 頁])

George Dickie による議論が示唆するように、美的経験は、他の目的(ここでは、試験の準備)を持っている場合でも生じうるものである。Stecker 自身もこの点を強調しており、分析美学者の間ではこの点について十分な合意が成立している(e.g. Stecker 2001: 77-8; Carroll 2000: 204-6; Durà-Vilà 2016: 94-5; Matthen 2017: 16; Nanay 2019: 18[邦訳 38 頁])。他の目的を持っていることは、美的経験が生じることを必ずしも妨げないのだ。無目的としての解釈を採用すると、最小説は他の目的を伴った経験を美的経験から不当に除外するという問題を抱えることになる。

伝統に基づいてはいるものの見込みのない解釈の一つ確認したところで、以下では、この問題点を回

¹⁰ 美的価値や美的経験に対する理論は、伝統的見解に基づく理論の方が、そうでない理論よりも望ましいとされている。Durà-Vilà によれば、この方法論的前提は、最小説を擁護する Stecker と最小説を批判する論者 (Carroll) との両方によって共有されている (Durà-Vilà 2016: 86)。本論文も、この方法論的前提を共有している。

¹¹ 無関心性および Stolnitz によるその解釈の詳細については、佐々木健一による整理を参照せよ (佐々木, 1995: 179-190)。

避することができるような、よりもっともらしい解釈を検討する。

ここで検討する解釈によれば、〈それ自体のための注意〉要件が満たされるのは、〈対象の諸性質に注意を向けること自体から得られる、快や不快、満足や不満足などが、対象の諸性質に注意を向けることを動機づける〉場合である。この解釈を〈動機的評価としての解釈〉と呼ぼう。というのも、この解釈によれば、〈それ自体のための注意〉要件が満たされるのは、快や不快などを得る(すなわち、**評価する**)ことが対象の諸性質への注意を**動機づける**場合であるからだ。

この解釈は、他の目的を伴った経験が美的経験になる余地を適切に残すことができる。たとえば、ジョーンスは試験対策をするために音楽を聴き始めたが、このことは、聴取することによって快や満足がもたらされ、その快や満足が音楽への注意を動機づけることと対立しない。動機的評価としての解釈を採用する場合、最小説は目的を伴った経験を美的経験に分類することができるのだ。

なお、この解釈は、おそらく Stecker 自身が(暗黙裡に)採用している解釈である。Stecker は、〈それ自体のための注意〉要件を、対象の諸性質に「それら自体のために、もしくはまさにその経験に**内在的な報酬のために**、注意を向けること」としても表現しており、そしてこの表現における「報酬 payoff」の例として快を挙げている(2010: 52-3[邦訳 85-6 頁]、太字は引用者)。つまり、ここで Stecker は〈それ自体のための注意〉要件を、〈経験に内在的な報酬(快など)のために注意を向けること〉と言い換えているのである。だとしたら、〈それ自体のための注意〉要件の内実は、動機的評価としての解釈によって正確に捉えられるだろう。というのも、〈経験に内在的な快のために注意を向けること〉と、〈経験それ自体から得られる快が注意を動機づけること〉は、同じことを指すと考えられるからである。第2節で述べたように、Stecker は〈それ自体のための注意〉要件について詳しく説明しておらず、Stecker 自身がどのような解釈を採用しているかは必ずしも明らかではない。だが、動機的評価としての解釈は、Stecker がしている複数の表現と矛盾しないものであり、Stecker に無理なく帰せられる解釈である^{*12}。

動機的評価としての解釈を採用するならば、最小説は、ある美学的伝統に従うものになる。美的経験は、それ自体でその対象への関与を動機づけるものとして伝統的に捉えられてきた(cf. Gorodeisky & Marcus 2022: 2527-8)。たとえば、私たちがある絵画の美しさを経験するとき、私たちは、その経験自体によって、(実際に絵画鑑賞を継続するかどうかはさておき)その絵画の鑑賞を継続するように動機づけられる。美的経験においては、他の報酬や利益ではなく、対象へ一定の仕方に関与すること自体によって、対象への関与が動機づけられると考えられてきたのである。一方、動機的評価としての解釈によれば、〈それ自体のための注意〉要件が満たされるのは、対象の諸性質に注意を向けること自体から得られる快や不快などが、対象への関与(注意)を動機づける場合である。動機的評価としての解釈を採用する場合、〈美的経験はそれ自体でその対象への関与を動機づける〉とする点で、最小説はこの美学的伝統を踏襲することになる^{*13}。

¹² この点については、吉沢文武氏および下道亮成氏によるコメントから示唆を得た。

¹³ Mohan Matthen は、同様の美学的伝統に従うような仕方、美的な快をより詳細に特徴づけようとしている(Matthen 2017)。なお、Matthen による議論は、快をもたらす正の美的経験のみを対象とするものである。この点において、正と負の美的経験の両方を対象とする本論文の議論とは、問題関心を異にしている。

動機的评价としての解釈には、無目的としての解釈が抱えていた問題点を回避しつつ、また Stecker が〈それ自体のための注意〉要件に対して行っている別の説明と適合しているというもってもらしさが、さらに、一定の美学的伝統に従っているという利点もある。だが、以下で指摘するように、この解釈を採用すると最小説は問題含みになってしまう。

動機的评价としての解釈を採用すると最小説にどのような問題が生じるかを議論するにあたって、「動機づける」という言葉の用法をあらかじめ整理しておこう。「動機づける」という言葉には、①正の動機づけに限定する用法と、②正と負の動機づけの両方を含む用法との、二つが考えられる^{*14}。たとえば、〈その絵画を観ることは快いから、その絵画を観たい〉という場合は、①の用法でも②の用法でも、〈その絵画がもたらす快が、その絵画を観ることを動機づけている〉といえる。一方、〈その絵画を観ていると不快なので、その絵画は観たくない〉という場合は、絵画がもたらす不快が、①の用法では絵画を観ることを動機づけていないが、②の用法ではその絵画を観ることを動機づけている。②の用法では、絵画がもたらす不快が、その絵画を観ることに負の動機づけを与えている、ということになるのだ。以下ではまず、①の用法に絞った場合の最小説が抱える問題点を議論する。その後で、②の用法まで広げた際の最小説を検討する。簡略化のため、①の用法に従った場合の動機的评价としての解釈を〈正の動機的评价としての解釈〉、②の用法に従った場合の動機的评价としての解釈を〈正または負の動機的评价としての解釈〉と呼ぼう。

正の動機的评价としての解釈を採用すると、最小説に次のような問題が生じる。この解釈を採用すると、最小説は、負の美的価値に対する経験の一部を美的経験から不当に除外してしまうのだ。負の美的価値は、しばしば私たちに不快や不満足をもたらすが、これらは通常、対象への注意を妨げるものであり、正に動機づけるものではない。たとえば、俳優の演技のぎこちなさを理由に、途中で映画を観るのを止めなくなる場合や、歌唱や演奏の拙さを理由に、聴取を止めなくなる場合がある。これらの経験においては、対象の諸性質に注意を向けることによって得られる不快や不満足が、対象への注意を妨げており、正に動機づけていない。そのため、正の動機的评价としての解釈を採用する場合、これらの経験は〈それ自体のための注意〉要件を満たさないため、美的経験から除外されることになる。正の動機的评价としての解釈を採用すると、負の美的価値に対するこれらの経験が、美的経験から不当に除外されてしまうのだ。

なお、私は、負の美的価値に対するすべての経験において、不快や不満足が対象への注意を妨げると主張しているわけではない。負の美的価値に対する経験において、不快などが対象への注意を正に動機づけることは確かにある。たとえば、演技のぎこちなさを不快に感じつつ、そのぎこちない演技をあえて味わおうとするような美的経験は、たしかに存在する。とはいえ、この指摘は本節の最小説批判に対する反論にはならない。以上の批判が依拠しているのは、負の美的価値に対する経験のなかには、不快などが対象への注意を妨げる経験が**存在する**ことである。以上の批判に反論するために示す必要があるのは、〈負の美的価値に対する経験のなかに、不快などが対象への注意を正に動機づける経験が存在する〉ことではなく、〈負の美的価値に対する**すべての**経験において、不快などが対象への注意を正に動機づけている〉ことである。だが、そのようなことは直観に著しく反するだろう。

本節の最小説批判については、次のような反論が想定される。その反論によれば、〈それ自体のため

¹⁴ この点を明確化するように示唆してくれた匿名の査読者に感謝する。

の注意)要件は、〈経験それ自体から得られる快や満足などが注意を正に動機づける〉場合に満たされると解釈するのではなく、〈経験それ自体から得られる快や満足など、あるいはその快や満足などに対する信念や欲求が、注意を正に動機づける〉場合に満たされると解釈すべきである^{*15}。この新たな解釈を採用すれば、反例として挙げられた負の美的価値に対する経験も、美的経験に含めることができるようになる。というのも、負の美的価値に対する経験においても、快や満足に対する事前の信念や欲求が、対象への注意を正に動機づけていると考えることができるからである。たとえば、演技のぎこちなさを理由に、途中で映画を見るのを止めたくなる場合においても、〈その映画や演技は快や満足をもたらすだろう〉という信念や、〈その映画や演技によってもたらされる快や満足を経験したい〉という欲求が当初はあったのだ、と考えることができる^{*16}。

以上の反論については次のように応答することができる。たしかに、負の美的価値に対する経験のなかには、快や満足に対する信念や欲求が対象への注意を正に動機づけている経験が存在する。そのため、この新しい解釈を採用することで、最小説は以上で提示した反例の一部を美的経験に分類することができるだろう。だが、負の美的価値に対する経験のすべてにおいて、快や満足に対する信念や欲求が対象への注意を動機づけているわけではない。美的経験の中には、突然出くわした対象の醜さや、何気なく注意を向けた対象のおぞましさにによって不快を覚え、その対象から注意をそらしたくなる経験がある^{*17}。たとえば、次のような経験がありうる。あなたが道を歩いていると、路上に何か赤黒いものがあることに気付いた。何かと思って目を凝らしてみると、それは無残にも車に轢かれてしまったネズミの死骸である。死骸の醜さとおぞましさに不快を覚えたあなたは、死骸から目をそらした。このような経験においては、快や満足に対する事前の信念や欲求を、あなたは持っていない。そのため、以上の反論が示す新たな解釈を採用したとしても、これらの経験は〈それ自体のための注意〉要件を満たさない。その結果、これらの経験は、醜さやおぞましなどの負の美的価値に対する経験であるにもかかわらず、美的経験から除外されてしまうのだ。

本節の最小説批判については、次のような別の反論も想定される。伝統的には、美的経験はそれ自体で対象への関与を正に動機づけるものだと考えられてきた。だとしたら、俳優の演技のぎこちなさを理由に映画を見るのを途中で止めたくなる経験や、歌唱や演奏の拙さを理由に聴取を止めたくなる経験、そして、突然出くわした対象の醜さによって対象から注意をそらしたくなる経験などは、美的経験だと考えるべきではない。したがって、これらの経験を美的経験から除外することは、最小説にとっての問題にはならない^{*18}。

¹⁵ もしかしら、Stecker が(暗黙裡に)支持しているのはこの新たな解釈かもしれない。というのも、Stecker は、〈それ自体のために注意〉要件は、「価値を見つけることの期待を指している」と述べることもあり(Stecker 2006a: 4)、この表現における「期待 expectation」とは将来得られる快や満足に対する信念を指す、と考えることができるからである。

Stecker 自身の考えがどちらであるかはさておき、この解釈を採用した場合でも最小説は成功しないというのが、本文の議論が示すことである。

¹⁶ この反論は、井頭昌彦氏によるコメントから示唆を得たものである。

¹⁷ Carroll や Durà-Vilà は、期待を伴わない美的経験が存在することを明示的に認めている(Carroll 2002: 155; Durà-Vilà 2016: 91-3)。

¹⁸ この反論は、豊田真菜氏によるコメントから示唆を得たものである。

この反論には次のように応答することができる。第1節で述べたように、最小説は、美的価値を理解・説明するという目的のために提案されたものである(cf. Stecker 2006a: 1-2)。思い出そう。Steckerの立場(経験主義)は、美的価値という本来の被説明項を美的経験という説明項を用いて説明しようとしているのである。俳優の演技のぎこちなさを理由に映画を見るのを途中で止めたくない経験においては、〈ぎこちなさ〉という負の美的価値が、主体に一定の影響を与えている。このような場合における負の美的価値をSteckerの立場から説明するためには、(美的経験に関する一つの伝統的見解に背くことになったとしても、)このような経験も美的経験に含める必要がある。もちろん、美的経験の定義は、その他の点において同じであるならば、美的経験についての伝統に基づいている方が望ましい(Durà-Vilà 2016: 86)。だが、これは唯一の考慮事項ではない。仮に、以上のような経験を美的経験から除外すると、Steckerの立場からは、以上のような経験における負の美的価値を説明することができなくなる。これは、Steckerの立場にとっては、美的経験に関する数ある伝統的見解の一つに背くことよりも受け入れがたい帰結だろう。Steckerの立場から以上の議論に反論するためには、以上のような経験における〈ぎこちなさ〉などは美的価値ではないと主張する必要がある。だが、この主張は直観に著しく反するだろう。

ここまでは、「動機づける」という言葉の用法を正の動機づけに限定して議論を進めてきた。以上の議論が示すのは、「動機づける」という言葉の用法を正の動機づけに限定すると、最小説は負の美的価値の経験を美的経験として説明できなくなる、ということである。最小説は、美的経験の定義として狭すぎるものになってしまうのだ。では、「動機づける」という言葉の用法を、正と負の両方の動機づけを含むものとする場合はどうか。以下では、〈正または負の動機的評価としての解釈〉を採用した場合の最小説について検討する。

正または負の動機的評価としての解釈を採用するならば、以上で指摘した問題を最小説は回避することができる。たとえば、俳優の演技のぎこちなさを理由に映画の視聴を中断したくなる場合や、歌唱や演奏の拙さを理由に聴取を止めたくない場合においては、不快が、対象への注意に負の動機づけを与えているということができる。「動機づける」という言葉の用法を正と負の動機づけの両方を含むものとすることによって、最小説はより多くの経験を美的経験として分類することができるのだ。

だが、正または負の動機的評価としての解釈を採用すると、今度は別の問題が生じてしまう。これを採用した場合、最小説は、美的経験ではない経験を美的経験に分類してしまうことになるのだ。たとえば、最小説は次のような痛みの経験を不当に美的経験に分類してしまう。あなたは、医者に腹痛の状態をできるだけ詳しく伝えるために、腹痛(これは身体という対象が持つ質——知覚可能な性質——である)にそれを識別するような仕方では注意を向けたが、医者が腹痛の状態を了解すると、これ以上の苦痛(不快)を感じたくないと思ったあなたは、注意を別の何かに逸らそうとして、夕食の献立について考え始めた。この経験では、対象(身体)の質(痛み)に識別するような仕方では注意を向けること自体から得られる不快が、対象の質に注意を向けることに負の動機づけを与えている。そのため、正または負の動機的評価としての解釈を採用した場合の最小説は、この経験を美的経験に分類する。だが、美的経験に関する伝統と直観はこの経験を美的経験から除外するだろう。正または負の動機的評価としての解釈を採用すると、最小説は、以上のような痛みの経験を美的経験に不当に分類してしまうという問題を抱えることになるのだ。

誤解を避けるために、次の点を明らかにしておこう。私は、あらゆる痛みの経験は美的経験になり得ないとは主張しているわけではない。私の議論が依拠しているのは、痛みの経験の中には美的でない経験が存在し、上で挙げたような経験(医者に腹痛の状態を詳しく伝えようとする経験)はその美的でない経験の一部である、という主張である。美学者のなかには、自身の身体に生じる感覚が美的経験になりうると主張する者もいる。たとえば Sherri Irvin は、「痒みを搔く」と題された論文において、痒みの経験やそれを搔く経験が美的経験になりうると主張している (Irvin 2008a)。同様に、痛みの経験の中にも、美的経験として認められるような経験が存在するかもしれない。これらの主張は、私の議論とただちに対立するものではない。

最小説に対して、次のような修正案を思いつく者がいるかもしれない。美的経験における「対象」に一定の制約を加えることで、痛みの経験を美的経験から除外すればよいのではないか。すなわち、美的経験における「対象」は、〈経験主体にとって外的なものに限る〉としたら、以上の問題を回避することができるのではないか¹⁹。

以上の修正案は、経験主体の身体感覚が美的経験の対象となりうると主張する論者たちの方針と衝突する (e.g. Irvin 2008a; Shusterman 1999)。これらの論者は、〈美的経験の対象は経験主体にとって外的なものに限る〉という前提を拒否しつつ、痒みなどの経験が美的経験になると主張している。そのため、以上の修正案を擁護する場合には、これらの論者の議論を正当に拒否する必要があるが、それには少なくとも議論が必要であるだろう。第 4.1 節では、これらの論者の方針と衝突することを避けつつ、痛みの経験を美的経験から適切に除外する方法を提案する。

以上の議論をまとめる。本節では、〈それ自体のための注意〉要件が満たされるのは、〈対象の諸性質に注意を向けること自体から得られる、快や不快、満足や不満足などが、対象の諸性質に注意を向けることを動機づける〉場合であるとする、動機的評価としての解釈を検討した。この解釈は、おそらく Stecker 自身が暗黙裡に採用しているものであり、かつ、〈美的経験はそれ自体でその対象への関与を動機づける〉とする美学的伝統に従うものである。だが、この解釈を採用すると最小説に問題が生じてしまう。「動機づける」を正の動機づけに限定して考えると(正の動機的評価としての解釈)、ごちなさや醜さなどの負の美的価値に対する経験を美的経験として分類できなくなる。最小説は、美的経験の定義として狭すぎるものになってしまうのだ。その一方で、「動機づける」を負の動機づけを含むものとして考えると(正または負の動機的評価としての解釈)、今度は、痛みの経験などの美的でない経験を美的経験として分類してしまう。最小説は、美的経験の定義として広すぎるものになってしまうのだ²⁰。

もちろん、以上の議論は、最小説を十全な定義にするような解釈がこれから現れる可能性がないことを示しているわけではない。だが、以上では、(おそらく) Stecker 自身に帰せられる、かつ、美学的伝統に基づく、一見したところもっともらしい解釈(動機的評価としての解釈)を採用した場合に、最小説が問題含

¹⁹ この修正案は原虎太郎氏に負う。

²⁰ したがって、動機的評価としての解釈から動機づけの要素を除いて、〈それ自体のための注意〉要件は、〈対象の諸性質に注意を向ける経験自体から、快や不快、満足や不満足などが得られる〉場合に満たされると解釈したとしても、依然として最小説は問題を抱えるものとなる。なぜなら、この解釈は、正または負の動機的評価としての解釈よりも、〈それ自体のための注意〉要件を緩く解釈するものであるからだ。

みになることを確認した。以上の議論は、最小説に修正や明確化が必要であることを確かに示唆しているはずだ。このことに反対する者は、最小説を十全な定義にするような解釈を新たに提示するか、あるいは、以上の議論には致命的な欠陥があることを示す必要があるだろう。

本論文の中心的論点である、最小説に対する批判は以上である。本論文の残りの部分では、本節で指摘した最小説の問題点を踏まえ、それを乗り越えるための修正方針について議論する。

4 最小説の修正方針

本節では最小説の修正方針を検討する。最小説を実際に修正し、擁護することは本論文の範囲を超えてしまうため行わない。以下では、第3節で指摘した問題点に適切に対処しうる、有望な修正案を提示することを目指す。

本節では次の二つの作業を行う。まず、第4.1節において、〈最小説は、質および意味ある特徴を除き、注意の対象を形式に限定すべきだ〉と提案する。ここで提示する修正案は、注意の対象を形式に限定しつつ、正または負の動機的评价としての解釈を採用することで、第3.2節で指摘した問題に対処するというものである。次に、第4.2節において、識別性要件の内実を提案する。第2節で指摘したように、識別性要件については、その重要性(美的な快と非美的な快とを区別すること)は示唆されるものの、その内実(識別するような仕方では注意を向けるとはどういうことか)が十分に説明されていない。第3.1節で述べたように、定義が掲げる要件の内実が不明確であることは、その定義が抱える欠点の一つとして数えられる。第4.2節では、美的経験における注意の典型的なあり方を示すことで、識別性要件に対して一定の内実を与える。

4.1 注意の対象を形式に限定する

最小説では、対象の「形式・質・意味(意味ある特徴)」が美的経験における注意の対象として挙げられていた。ところで、正または負の動機的评价としての解釈を採用したときに痛みの経験が美的経験に分類されてしまう原因は、このリストに質が含まれていることかもしれない。だとしたら、この要件から質を取り除くことによって、痛みの経験を適切に除外できるのではないか。Panos Parisは、「形式」を従来よりも広く定式化しつつ、美的性質(これは、美的価値と基本的に重なるものである)を所有するのは形式を持つ対象のみであると主張している(Paris 2024)。この主張が正しいとしたら、美的経験における注意の対象のリストから質と意味(意味ある特徴)を削除したとしても、最小説は問題含みにならないはずである。

なお、もしそれによって更なる問題に突き当たることがないならば、質だけでなく「意味(意味ある特徴)」もリストから削除すべきだと私は考えている。これには次のような理由がある。「意味(意味ある特徴)」をリストから削除することによって、最小説はより統一的な定義となる。美的経験に対する定義は(あるいは哲学における定義は一般に)、複数の十分条件を選言によって組み合わせるものよりも、単一の必要十分条件を指摘するものや、複数の必要条件を連言によって結ぶものの方が統一的であり、統一的であることは好意的に評価される(cf. Durà-Vila 2016: 86)。「質」と「意味(意味ある特徴)」をリストから削除するこ

とによって、最小説はより統一的で望ましい定義となるのだ。

本論文が提案する修正案をより詳細に説明しよう。まず、形式に関する Paris の特徴づけを確認する。Paris は、従来の形式概念に一定の変更を加えることで、形式概念を拡張している。

従来の形式概念:対象が持つ知覚可能な諸要素とそれらの相互関係の集合体(Paris 2024: 79)

拡張された形式概念:対象が持つ経験可能な諸要素とそれらの相互関係の集合体(Paris 2024: 82)

従来の形式概念における「知覚可能」という限定が、拡張された形式概念では「経験可能」という限定に置き換えられていることに注目しよう。Paris は、このような仕方で形式概念を拡張したうえで、この意味での形式を持つことが、ある対象が美的性質を所有する候補になるための必要十分条件であると主張している(Paris 2024)。

なお、拡張された形式概念における「経験可能な諸要素」という表現が指しているのは、〈知覚または認知が可能な諸要素〉であると理解すべきである²¹。Paris はこの点を明示的には述べていないが、Paris が形式概念を以上のような仕方で拡張した動機に照らせば、この点は明らかである。Paris の動機は、数学における証明や人間の性格などの非知覚的な対象が持つ美的価値を、美的価値として包括することにある(Paris 2024: 82)。そして、これらの非知覚的な対象は、思考や熟考などの認知プロセスを通して経験されうるものである(Paris 2024: 82)。この動機を踏まえるならば、拡張された形式概念における「経験可能な諸要素」という表現が指しているのは、〈知覚または認知が可能な諸要素〉であると理解すべきである。

「質」と「意味(意味ある特徴)」をリストから単に削除する場合、最小説は痛みの経験を美的経験から除外できるが、新たな問題を抱えてしまうだろう(たとえば、単色で塗りつぶされた絵画に対する美的経験(cf. Irvin 2008b: 40)を認められなくなる、など)。だが、拡張された形式概念を取り入れるならば、痛みの経験の一部を除外しつつ、「質」や「意味(意味ある特徴)」をリストに含めることによって美的経験に分類してきた経験の一部を、美的経験に分類し続けることができるはずだ。だとしたら、最小説は新たな問題に突き当たることなく、第 3.2 節で提示した問題を回避できるかもしれない。この可能性について、より詳細に検討する。

まず、以上の修正案を採用した場合、最小説は痛みの経験をどのように分類するだろうか。Paris は、「場所の特定が可能だが[localisable]、志向性を持たない単純な感覚」は、拡張された意味での形式さえ持たないため、美的性質を持つことができないと示唆している(Paris 2024: 82)。以上の修正案を採用した場合、この特徴づけに当てはまるような単純な痛みの経験を最小説は美的経験から除外することになる。一方で、複数の経験可能な要素やそれらの相互関係を持つような、ある程度の複雑さを持つ痛みの経験については(もしそのような経験があるとすれば)、痛みが持つ〈形式〉に識別するような仕方で注意を向け、それによって快や不快などがもたらされる限り、美的経験に分類されることになる。第 3.2 節で述べたように、身体感覚の経験が美的経験になりうるという議論がすでになされていることを踏まえるならば、

²¹ この点を明確化するように示唆してくれた匿名の査読者に感謝する。

痛みの経験の一部を美的経験から除外しつつ、特定の条件つきで美的経験になることを認める立場は、穏当なものだといえるだろう。

同様の議論が、非美的な快についても当てはまる。第 3.1 節で指摘したように、従来の最小説は、美的な快を非美的な快から十分に区別していないという問題点を抱えている。たとえば、従来の最小説は、満腹感に識別するような仕方では注意を向けることによって得られる快を、美的な快として判定してしまうのだ。だが、注意の対象を形式に限定するならば、これらの感覚のうち「場所の特定が可能だが、志向性を持たない単純な感覚」に注意を向けることによってもたらされる快は、美的な快から除外されるだろう。一方で、複数の経験可能な要素やそれらの相互関係を持つような感覚については、その形式に識別するような仕方では注意を向けることによって快がもたらされるならば、その快は美的な快に分類されることになる。繰り返しになるが、痒みなどの身体感覚の経験が美的経験になりうるという議論がすでになされていることを踏まえるならば、身体感覚の経験が特定の条件つきで美的経験になることを認める立場は、穏当なものだといえるはずだ。これまで Stecker は、識別性要件によって美的な快と非美的な快とを区別しようとしてきたが (cf. Stecker 2010: 49 [邦訳 79-80 頁])、第 3.1 節の議論が示すように、識別性要件だけでは美的な快と非美的な快とを十分に区別することができない。本論文の提案は、美的な快を非美的な快から区別するための基準を、識別性要件だけではなく注意の対象 (形式) の要件にも求めるべきだ、というものである。この提案は、言い換えれば、〈快が対象の形式に由来しているかどうか〉が、美的な快と非美的な快とを区別する基準の一つとなる、というものだ²²。

最小説は質や意味 (意味ある特徴) をリストに含めることで、色や形などの単純な性質の経験や、ストーリーや絵画の描写内容などの経験を美的経験に含めていた。以上の修正案を採用した場合、最小説はこれらの経験を美的経験として分類することができるだろうか。まず、ストーリーや絵画の描写内容などは、拡張された意味での形式を持つ。そのため、以上の修正案を採用した場合でも、最小説はこれらの経験を依然として美的経験に分類することができる。色の経験はどうか。色は色相、彩度、明度の三要素に分解され、これらの要素やその相互関係は独立して経験可能であると Paris は主張している (Paris 2024: 84)。この主張が正しいければ、以上の修正案を採用した場合でも、最小説は色の経験を依然として美的経験に分類することができる。形 (shape) の経験はどうか。まず、複数の要素に分解されるような複雑な形は、拡張された意味での形式を持つといえる。さらに、私の観察によれば、私たちが形を経験するときは常に、その形が描かれている色などの他の性質も同時に経験しており、純粋に形のみを経験することはない。この観察が正しいとしたら、以上の修正案を採用した場合でも、最小説は形に対する経験を依然として美的経験に分類することができる。

修正案に対する検討は以上である。美的性質を所有するのは (拡張された意味での) 形式を持つ対象のみであるとする Paris の主張の成否と、拡張された形式概念を最小説が問題なく取り入れることができるかという点については、更なる議論が必要であるだろう。だが、ここまでの検討は、少なくとも更なる議論を行う意義があるといえるほどには、以上の修正案が有望であることを示しているはずだ。

²² この点を明確化するように示唆してくれた匿名の査読者に感謝する。

4.2 識別性要件の内実を提案する

最後に、識別性要件の内実を提案する。第2節で指摘したように、識別性要件については、その重要性(美的な快と非美的な快とを区別すること)が示唆されているものの、その内実(識別するような仕方では注意を向けるとはどういうことか)が十分に説明されていない。第3.1節で述べたように、定義が掲げる要件の内実が不明確であることは、その定義が抱える欠点の一つとして数えられる。とはいえ、美的経験において発揮される注意は多様であるため、識別性要件が満たされる必要十分条件を示すことは難しい。そのため、以下では、「識別するような仕方では注意を向けること」の二つの典型例を示すことによって、識別性要件に一定の内実を与えることを目指す。

典型例の一つ目は、美的経験における注意の特徴としてすでに指摘されているものである。すなわち、美的経験においてはしばしば、対象がもつさまざまな性質へと注意が向けられる(cf. Nanay 2016)。たとえば、絵画に対する美的経験においては、絵画が持つ色、形、質感、およびこれらの関係的性質などの、さまざまな性質に注意が向けられる。美的経験における注意の対象を「形式」に限定するという本論文の文脈にひきつけるならば、このような注意のあり方は、形式を構成する諸要素とそれらの関係的性質の多くに注意を向けることに相当するだろう。このような注意のあり方は、「識別するような仕方では注意を向けること」の典型例の一つである。

典型例の二つ目は、美的経験における注意の特徴としてこれまで十分に注目されてこなかったものである。それは、〈対象の性質に注意を向けることにより、比較的高い確定性を持った性質を対象に帰属させる〉ことである。以下では、この二つ目の注意のあり方も、美的経験の特徴をなす「識別するような仕方では注意を向けること」の典型例であると主張する。そのためには、まず、確定性に関する三つの前提を共有する必要がある。

第一に、多くの種類の性質は一定の程度の確定性(determinacy)を持つものである。確定性については、具体例から考えると把握がしやすい。たとえば、ある対象が〈色がついている being coloured〉という性質を持つ方法はいくつかあるが、〈赤色である being red〉という性質を持つことはその方法の一つである。このとき、赤色であるという性質は、色がついているという性質に対する確定的(determinate)性質である。そして、色がついているという性質は、赤色であるという性質に対する確定可能的(determinable)性質である。これらの関係は相対的なものである。たとえば、赤色であるという性質は、紅色であるという性質に対する確定可能的性質であり、紅色であるという性質は、赤色であるという性質に対する確定的性質である。そして、色以外のさまざまな種類の性質も、確定的-確定可能的の関係を持つ。たとえば、〈正方形である〉という性質は、〈四角形である〉という性質に対する確定的性質である(cf. Funkhouser 2006)。また、確定性は、二つの性質同士の関係としてだけでなく、一つの性質が持つ程度(degree)としても考えられる(cf. Nanay, 2010: 267, 2020: 164)。たとえば、〈紅色である〉、〈赤色である〉、〈色がついている〉という性質は、それぞれ異なった程度の確定性を持っている、と考えることができる。〈紅色である〉という性質は、この三つの性質のうちでは最も高い程度の確定性を持っており、反対に、〈色がついている〉という性質は、この三つの性質のうちでは最も低い程度の確定性を持っている、というふうに整理することができるのだ。

第二に、ある対象が、それ以上の確定的性質(e.g. 紅色である)を持つこと抜きに、確定可能的性質(e.g. 赤色である)だけを持つことはありえないものの、それ以上の確定的性質を表象せずに、確定可能的性質だけを表象することはありうる(Nanay 2020: 163)。たとえば、「この服は赤色である」という文では、その服に〈赤色である〉という性質が帰属させられているが、それ以上の確定的性質(どのような赤色なのか)は帰属させられていない。Bence Nanay によれば、知覚表象にも同じことがいえる。たとえば、私たちの周辺視野に映る対象には、確定性の程度が低い性質だけが帰属させられている(Nanay 2020: 163)。

第三に、Nanay によれば、注意が持つ機能の一つは、対象に帰属させられる性質が持つ確定性の程度を高めることである(Nanay 2010: 266, 2020: 163, 2024: 15-6)。たとえば、私が自分の携帯電話の色に注意を向けるとき、携帯電話に確定性の程度がより高い色が帰属させられる。反対に、携帯電話の色に注意を向けていないとき、確定性の程度がより低い色が帰属させられる(Nanay 2010: 266)。なお、注意に対するこの特徴づけは、経験科学による知見を踏まえたものである(Nanay 2020: 163, 2024: 15-6)。

注意に関する以上のような理解を踏まえ、美的経験の特徴をなす「識別するような仕方で注意を向けること」の典型例の一つは、〈対象の性質に注意を向けることにより、比較的高い確定性を持った性質を対象に帰属させる〉ことであると提案する。「比較的高い」という表現によって私が意味しているのは、〈日常生活において、対象に帰属させられがちな性質が持つ確定性の程度よりも高い〉、ということである。以上の提案は注意に関する科学的・哲学的理解に依拠するものであり、次に見るように、さらなる利点を持つものである。

この提案は、美的価値に対する次のような伝統的な特徴づけに基づいている。美的価値は、いわゆる言い難い(ineffable)ものとして考えられることが多い。たとえば、ある対象の美しさは、言葉によって完全には説明することができない(あるいは少なくとも、説明することが難しい)ものである。これは、美的価値に対する前理論的な観察であり、美学者は、美的価値が持つこのような特性を、それぞれ異なった仕方で自身の理論へ掬い上げようとしてきた²³。私は、以上の提案によって同じことを試みている。以上の提案は、次のような仕方で美的価値のいわゆる言い難さを示唆する。以上の提案によれば、一部の美的経験が成立するためには、確定性の高い性質が対象に帰属させられる必要がある。だが、性質の確定性が高まれば高まるほど、それを、指示語を除いた自然な言語表現で指示することは困難となる。たとえば、私たちは〈赤色である〉や〈紅色である〉などの言語表現を用いることで、目の前のリンゴがどのような色をしているのかを、ある程度の確定性の高さで伝えることはできる。だが、それがどのような赤色なのかをより高い程度の確定性で伝えるためには、〈まさにこのような赤色である〉というような、指示語を含んだ表現を用

²³ 〈美学者は、美的価値のいわゆる言い難さを、それぞれ異なった仕方で自身の理論へ掬い上げようとしてきた〉という洞察は、松永伸司氏に負う。美的価値の「いわゆる言い難さ」を捉えようとした(と解釈できる)美学者の例として、美的概念の非条件支配性を主張した Frank Sibley や、美的なものの徴候として意味論的・統語論的稠密と相対的充満を指摘した Nelson Goodman を挙げることができる(Sibley 1959; Goodman 1976)。とくに、Goodman は、自身の特徴づけが美的なもののいわゆる言い難さを示唆するものであると明示している(Goodman 1976: 252-3[邦訳 289 頁])。さらに言えば、本文の提案は、Goodman による美的なものの特徴づけときわめて相性がよい。というのも、意味論的・統語論的に稠密なシステムに属する対象に適切に関与するためには、その対象に、確定性の高い性質を帰属させる必要があるからである。

いることが不可避であるだろう(カラーコードは自然な言語表現ではない)。美的価値が「いわく言い難い」のは、美的価値を経験するために、確定性の程度が高い性質(すなわち、指示語を除いた自然な言語表現で指示することがしばしば難しいもの)を経験する必要があるからではないか。このような仕方では、以上の提案は美的価値のいわく言い難さを示唆するのである。

ここでの具体例として最適なのは、写実的な絵画を美的に経験する場合かもしれない。例として、コルネリス・デ・ヘームによる静物画《果物籠のある静物》(1654 年頃制作)を美的に経験する場合を考えよう。この絵画から美的な満足を得るためには、絵具の色や形、位置などについて、確定性の程度がかなり高い性質を知覚的に表象する必要があるように思われる。たとえば、鑑賞者が、〈赤色の、だいたい丸い形が、だいたいこのあたりに描かれていて……〉といった具合に、確定性の程度が低い性質だけを知覚的に表象する場合、絵画の描写対象(桜桃などの果物)を同定することはできるかもしれないが、美的な満足を得ることはできないだろう。むしろ、美的な満足を得るためには、〈まさにこの色彩の赤色が、まさにこのような形で、まさにこの位置に描かれていて……〉といった具合に、確定性の程度が高い性質を知覚的に表象する必要があるように思われる。そして、以上の記述において「このような」などの指示語を使用することが余儀なくされていることから分かるように、確定性の程度が一定以上に高い性質を、指示語を除いた自然な言語表現によって指示することは難しい。

以上が、「識別するような仕方では注意を向けること」の、二つの典型例である。以上の説明は網羅的であるとはいいがたいが、識別性要件に従来よりも確かな内実を与えるものである。とくに、これまで十分に注目されてこなかった二つ目の典型例を踏まえることで、美的経験および美的価値についての理解を前進させることができるはずだ。

5 結論と今後の展望

Stecker は、美的経験という説明項を用いて、美的価値という被説明項にアプローチしようとする。このような立場(経験主義)が成立するためには、説明項として用いられている美的経験を適切に定義する必要がある。本論文では、Stecker が提案している美的経験の定義、すなわち最小説を批判的に検討した。本論文で指摘した問題点は、次の二点である。第一に、Stecker の期待に反して、〈美的経験においては、対象の諸性質にそれらを識別するような仕方では注意を向ける必要がある〉という識別性要件だけでは、美的な快と非美的な快とを十分に区別することができない(第 3.1 節)。第二に、〈美的経験においては、対象の諸性質に、それら自体のために、もしくはこの経験自体のために注意を向ける必要がある〉という〈それ自体のための注意〉要件は、(それが不明確であるために)複数の解釈を与えることができるが、いずれの解釈を採用したとしても、最小説は美的経験の外延を適切に指定することができない(第 3.2 節)。本論文では、これらの問題を解決するための修正方針を提案した(第 4 節)。その修正方針は、美的経験における注意の対象から「質」と「意味(意味ある特徴)」を除きつつ、形式概念を拡張するというものである。本論文ではまた、これまで十分に特徴づけられてこなかった識別性要件に一定の内実を与えた(第 4.2 節)。

本論文では扱うことができなかったものの、最小説に基づいて美的価値を説明するために取り組むべき課題がいくつかある。修正された最小説が美的経験に対する他の定義よりも優れていることを示すことはその一つである。これは、他の定義ではなく〈最小説に基づく〉美的価値の説明を擁護するために必要な取り組みである。また、第1節で述べたように、美的価値を満足のいく仕方で理解・説明するためには、美的問題(線引き問題)だけではなく、価値問題や規範問題にも取り組む必要がある。最小説に基づいて美的価値を理解・説明しようとする Stecker の立場については、本論文で行った美的問題の観点から検討に加えて、価値問題や規範問題の観点からの検討も行う必要があるだろう(cf. van der Berg 2020)。

謝辞

本論文の原稿に対しては、一橋大学の井頭昌彦ゼミ・吉沢文武ゼミの教員と院生の各氏、そして二名の匿名の査読者から示唆に富むコメントを多くいただいた。ここに記して感謝を申し上げる。

参考文献

- [1] Anderson, E. 2020. Aesthetic appreciation of silence. *Contemporary Aesthetics*, 18. Accessed November 10, 2025.
- [2] Carroll, N. 2000. Art and the domain of the aesthetic. *The British Journal of Aesthetics*, 40(2): 191-208.
- [3] ———. 2001. Enjoyment, indifference, and aesthetic experience: comments for Robert Stecker. *The British Journal of Aesthetics*, 41(1): 81-83.
- [4] ———. 2002. Aesthetic experience revisited. *The British Journal of Aesthetics*, 42(2): 145-168.
- [5] ———. 2006. Ethics and aesthetics: replies to Dickie, Stecker, and Livingston. *The British Journal of Aesthetics*, 46(1): 82-95.
- [6] ———. 2012. Recent approaches to aesthetic experience. *The Journal of Aesthetics and Art Criticism*, 70(2): 165-177.
- [7] ———. 2015. Defending the content approach to aesthetic experience. *Metaphilosophy*, 46(2): 171-188.
- [8] ———. 2023. Two approaches to aesthetic experience. *Journal of Aesthetic Education*, 57(4): 1-17.
- [9] Dickie, G. 1964. The myth of the aesthetic attitude. *American Philosophical Quarterly*, 1(1): 56-65. [邦訳:「美的態度という神話」 銭清弘訳, 『フィルカル』 9(3): 166-188, 2025]
- [10] Durà-Vilà, V. 2016. Attending to works of art for their own sake in art evaluation and analysis: Carroll and Stecker on aesthetic experience. *The British Journal of Aesthetics*, 56(1): 83-99.
- [11] Funkhouser, E. 2006. The determinable-determinate relation. *Noûs*, 40: 548-569.
- [12] Goodman, N. 1976. *Languages of Art: An Approach to a Theory of Symbols*. Hackett Publishing. [邦

- 訳:『芸術の言語』戸澤義夫, 松永伸司訳, 筑摩書房, 2017]
- [13] Gorodeisky, K. and Marcus, E. 2022. Aesthetic knowledge. *Philosophical Studies*, 179(8): 2507-2535.
- [14] Irvin, S. 2008a. Scratching an itch. *The Journal of Aesthetics and Art Criticism*, 66(1): 25-35.
- [15] Irvin, S. 2008b. The Pervasiveness of the Aesthetic in Ordinary Experience. *The British Journal of Aesthetics*, 48(1): 29-44.
- [16] Levinson, J. 1996. *The Pleasures of Aesthetics*. Cornell University Press.
- [17] Lopes, D. M. 2018. *Being for Beauty: Aesthetic Agency and Value*. Oxford University Press.
- [18] ———. 2024. *Aesthetic Injustice*. Oxford University Press.
- [19] Matthen, M. 2017. The pleasure of art. *Australasian Philosophical Review*, 1(1): 6-28.
- [20] Nanay, B. 2010. Attention and perceptual content. *Analysis*, 70(2): 263-270.
- [21] ———. 2016. *Aesthetics as Philosophy of Perception*. Oxford University Press.
- [22] ———. 2019. *Aesthetics: A Very Short Introduction*. Oxford University Press. [邦訳:『美学入門』武田宙也訳, 人文書院, 2025]
- [23] ———. 2020. Perceiving indeterminately. *Thought: A Journal of Philosophy*, 9(3): 160-166.
- [24] ———. 2024. *Perception: The Basics*. Routledge.
- [25] Niikawa, T. 2025. Consciousness is sublime. *Ergo: An Open Access Journal of Philosophy*, 12(28): 726-748.
- [26] Paris, P. 2024. Delineating beauty: On form and the boundaries of the aesthetic. *Ratio*, 37(1): 76-87.
- [27] Shelley, J. 2010. Against value empiricism in aesthetics. *Australasian Journal of Philosophy*, 88(4): 707-720.
- [28] ———. 2019. The default theory of aesthetic value. *The British Journal of Aesthetics*, 59(1): 1-12.
- [29] ———. 2022. The concept of the aesthetic. In E. N. Zalta, ed. *The Stanford Encyclopedia of Philosophy* (Spring 2022 ed.).
- [30] Shusterman, R. 1999. Somaesthetics: A disciplinary proposal. *The Journal of Aesthetics and Art Criticism*, 57(3): 299-313.
- [31] Sibley, F. 1959. Aesthetic concepts. *The Philosophical Review*, 68(4): 421-450. [邦訳:「美的概念」吉成優訳, 西村清和編『分析美学基本論文集』(pp. 99-137), 勁草書房, 2015]
- [32] Stecker, R. 2001. Only Jerome: a reply to Noël Carroll. *The British Journal of Aesthetics*, 41(1): 76-80
- [33] ———. 2006a. Aesthetic experience and aesthetic value. *Philosophy Compass*, 1(1): 1-10.
- [34] ———. 2006b. Carroll's bones. *The British Journal of Aesthetics*, 46(3): 282-286.
- [35] ———. 2010. *Aesthetics and the Philosophy of Art: An Introduction*, 2nd edition. Rowman & Littlefield Publishers. [邦訳:『分析美学入門』森功次訳, 勁草書房, 2013]
- [36] ———. 2019. *Intersections of Value: Art, nature, and the everyday*. Oxford University Press.

- [37] ———. 2023. Notes on aesthetic value. *The Journal of Aesthetics and Art Criticism*, 81(1): 103-104.
- [38] Stolnitz, J. 1960. *Aesthetics and Philosophy of Art Criticism*. Houghton Mifflin.
- [39] Van der Berg, S. 2020. Aesthetic hedonism and its critics. *Philosophy Compass*, 15(1): e12645.
- [40] 佐々木健一. 1995. 『美学辞典』. 東京大学出版会.

著者情報

藤本心太(一橋大学 shinta.aesthetic.experience@gmail.com)